

沖縄県民の声

県民 誇り
ウチナーンチュ
歴史 子ども
シンボル
涙 悲しい
ショック

首里城に寄せられた

応援メッセージ



再建を願う心は同じ！

県外からの支援者の声

旅行 祈る
大好き
家族 思い出
応援
訪れる

沖縄の人にも、県外から訪れた人にとっても、
首里城は特別な場所だった！



待ちに待った首里城正殿の完成に、喜びもひとしお！

なぜ首里城に寄附したの？
寄せられた言葉が語る
首里城への想いの源とは？

**首里城再建を願い
寄せられた多くの寄附金**

琉球王国の中心として栄え、世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の一つにも数えられる首里城。「首里城は沖縄のシンボル」とはよく耳にする言葉ですが、人々は具体的にどんな想いで首里城を捉えているのでしょうか？その謎を学術的なデータから紐解いたのが、観光心理学や旅行者行動論などを中心に研究している、琉球大学の屋宜智恵美先生です。

2019年の火災では、正殿を含む多くの建物が焼失し、火災直後から、県内外からたくさんの寄附が寄せられました。那覇市が行ったふるさと納税のクラウドファンディングでも、目標額の1億円を3日間で達成し、約9億4千万

教えてくれる人



屋宜 智恵美 先生
琉球大学国際地域創造学部教授。同大法文学部卒業。オーストラリアのジェームス・クック大学で博士課程修了。観光心理学や旅行者行動論を専門とする。

円が集まりました。屋宜先生は、クラウドファンディングに寄せられた約2万件の支援メッセージに着目。そのなかから2,328件のコメントを抽出し、どんな言葉がどんな組み合わせで、どれぐらい使われているかをコンピュータで調べる「テキストマイニング」という方法で分析したところ、県内と県外で、首里城への愛着の根っこにあるものの違いが浮かび上がってきました。



那覇市のクラウドファンディングページ。県内外から多くの寄附が寄せられた。

**心のよりどころとして
人と人を結びつける場所**

沖縄県内の寄附者からは、「ウチナーンチュ」「誇り」「涙」といった言葉が多く使われていました。首里城を自分たちの歴史や文化、アイデンティティそのものとして捉え、わが事のように心を痛めて支援していた様子がうかがえます。



一方、県外在住の寄附者からのコメントには「訪れる」「家族」「大好き」といった言葉が多く見られました。過去の旅行で

出や、「沖縄」という場所そのものが大好き」という強い情熱が、復興を応援する原動力になっていました。

つまり、県民にとっては誇りと一体感の象徴であり、県外の人にとっては大切な旅の思い出の場所であったということ。それでも、立場は違っても、「再建」を願う気持ちに変わりはありません。首里城は、沖縄に暮らす人と訪れる人の双方にとっての、心のよりどころといえそうです。

11月22日には正殿復元の完成式が行われ、翌23日から、いよいよ一般公開が始まります。ぜひ足を運び、全国から届いた温かい絆と沖縄の誇りを肌で感じてみませんか？

今回のまとめ

**立場が違えど
首里城を
想う気持ちは
変わらない！**

首里城火災後、復興を願う多くの寄附が集まりました。寄附金とともに寄せられたメッセージを調べると、県民は首里城をアイデンティティとして語っている様子が多く見受けられました。立場は違っても、再建への願いは同じ。首里城が心のよりどころとなっていたのです。